

編集委員会便り

「真夏の屋の夢」

このところ連日、最高気温が35℃を超えている。それでも、暑さ慣れをしたのだろう、以前ほどには暑さが身体にこたえなくなった。それもその筈である。梅雨の後半の7月から8月、9月の3ヶ月間の昼休み時間が2時間になってから、何年経っただろうか。今日はゆっくりと昼食を済ませてから、池に面した藤棚の下のベンチで昼寝としゃれ込んだ。ベンチに横になって静かに目を閉じると、ささやくように風が身体を通り越してゆくのを感じられて、これが1/fゆらぎかと、妙なところで感心させられたことだった。

同僚のSは、昼休みにテニスをするのを日課にしている、以前は12時になる前にあたふたと昼食をかき込み、すぐグラウンドに出て、1時に部屋へ戻って身体を冷やすために強烈にクーラーを効かせていたが、昼休みが2時間になってからは、たっぷりと時間があるため、運動が終わってから水場へ行って冷水タオルで身体をふき、ゆうゆうと着替えて部屋にもどってきている。その落ち着き払った動きを見ていると、一汗をかいた後の爽快で満ち足りた気持ちがちらにも伝わってくるようで、いかにも心地よい。

われわれは大学での研究職であるから、別に勤務時間にとらわれなくてもよいのかも知れないが、健康保持のためには規則正しい生活が一番だと思えるので、事情が許すかぎり、一般のサラリーマン並みに行動するように心掛けている。昔はそうはいかなかったが、今はそういう気風が浸透してきている。よいライフスタイルといえよう。

そもそも昼休み時間が2時間になったのは、冷房の際の室温を以前よりも高くするためだった。以前は25℃だったものが、いまでは28℃と、3℃も上昇している。これによって冷房のためのエネルギー消費が相当量、節減されているはずである。このような、夏の電力需要のピークカットが直接の目的であった。

以前のように昼休み時間が1時間では、昼食時間を除けば、あまり時間は残らないので、勢い、朝から晩

までクーラーの効いた室内にとどまってしまうやすく、その結果、いわゆる季節順化が現れなくなってしまう。そして、室温は冬並みに低い温度に設定されてしまう。それが夏の電力需要を押し上げていたので、その対策として考え出されたものである。

昼休み時間を1時間から2時間に延長すると、昼食時間を除いてもたっぷりと時間があるので、必然的に屋外に出る機会も多くなる。1日に1時間でも夏の日中の屋外の空気に触れると、1～2週間もすれば身体には季節順化が進行するので、そうすると何の苦もなく室温上昇を許すことができるようになる。

室温28℃を可能にするには、ほかにも有力な支援対策が効いていることを見落としてはならない。その代表格は服装である。以前は、夏でも男子の室内のワイシャツとネクタイが常識になっていたが、いまは素材が麻で、お坊さんの着用していた作務衣を基にしてアレンジした、なかなかしゃれた服装が普通になっている。風通しがよくて、涼しいのである。ちょっと改まった席では、その上に肩衣を羽織っていく。編集委員会に出かけるのも、この服装である。下はズボンでも、上に羽織った肩衣が様になっており、昔の家紋に代わって思い思いにデザインするのが、ネクタイ代わりに男のファッションになって、新しいアパレル産業の興隆にもつながっている。世界的にも、和風の近代化ということで好評のようである。

以前は、日本の労働時間が年間1,950時間で、ドイツの1,600時間からは350時間も長く、世界の不評を買っていた。エコノミック・アニマルと揶揄されていたことが思い出される。しかし、今は1,700時間となって、やっと品格を認めて一人前に扱ってくれているようで、ご同慶の至りである。

中村 泰人

(京都大学大学院工学研究科環境地球工学専攻教授)